

と見ゆ、此草昔は堅香子といふ、一名猪の舌ともいふ、萬葉集第十九天平感寶元年五月十二日、於越中國主館、大伴宿禰家持作之摯折堅香子草花一首、略 歌 萬葉目安に、堅香子花は、つ、じに似たる草なりとて、

小車の諸輪にかかるかたが、のいづれもつよき人心かなコガ新撰六帖には堅香子を読み誤りて檉とこゝろえ、木部に入れて、萬葉下句を寺井のうへの堅かしの花と出だせり、此草の形葉は、和大黃の初生、または車前葉のごとく、一根にたゞ二葉生じて相對す、其葉に淡紫色の斑點あり、山生は四月頃葉間に莖立ちて、莖頭に六瓣の紫花を開く、長五寸許、徑一寸五分許、唯一莖一花のみ、俯してひらく、百合花のごとし、瓣の末は上に翻る、希には白花もあり、根は白葱又は水仙のごとし、北國能登邊にては、此根を探り煮熟して食に供す、所在寒國に多く生ずる物なれど、今は諸國往々にあり、京都近邊は、叡山雲母坂篠原の中に多く生す、嫩葉を摘みて漬物となし菜に充つ、又播州神出山、雄子尾、雌子尾の山中に多くある事、播州名所圖會に載せたり、此根を探りて葛を製するごとくにし、餅とするを堅子餅カタコといふ、越前にて多く製す、南都にての製、東府へ獻上せらる、又大和宇陀葛屋藤助よりもおなじく獻上す、此草諸國方言多し、京師にてカタユリとも、初ユリともいふ、東府にてカバユリとも、フムタイユリともいふ、佐渡にてカタハナといふ、延命長生の語より事起りて、危篤の病人一統に服餌する風俗となり、遂には進獻供用の物となるも奇ならずや。

〔笈埃隨筆〕雜說八十ヶ條

奥州南部のカタクリは公儀へ獻上也、津輕の中別して寒國に生ず、故に熱暑を避る、其功を能人知りて、今賣物にあり、

〔採藥使記上奥州〕重康曰、奥州南部ニカタクリト云フ草アリ、其形チ百合ニ似タリ、花モユリニ似テ